

日本海



7 日御碕 経島(ふみしま)

経島は天然記念物「経島ウミネコの繁殖地」で、11月に飛来して5-6月に子育てをする時期は、猫のような声で鳴き騒いでいる。島は石英角斑岩の柱状節理になっていて、ちょうどお経の巻物を積み重ねたように見えることから、経島と名付けられたといわれている。経島には2000年の昔から夜を守る社として天照大神が祀られていたため、毎年8月7日夕方には、経島の向こうに沈む夕陽に向かい「夕陽の祭」が行われている。「伊勢神宮」は日の本の昼をまもり、日御碕神社は、日の本の夜を守る。



8 権現島・熊野神社

熊野神社は日御碕神社の本社で、宇龍港に浮かぶ権現島に祀られている。毎年旧暦1月5日に権現島を舞台にワカメ漁の始まりを告げる「和布刈(めくり)神事」がある。午後の神事にはワカメ汁が振る舞われるが、このワカメは旧暦元旦に行われる関門トンネルの門司市で行う「和布刈神事」が知られているが、その福岡県のワカメであると聞いたことがある。この門司の和布刈神事は、小説家松本清張が「時間の習俗」で紹介している。日御碕の和布刈神事を2000年の昔へタイムスリップするドラマとして紹介できないだろうか。



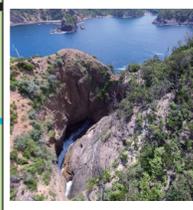
9 鷺浦・伊奈西波岐神社

祭神は、稲背経命(いなせはのみこと)で、大国主命が国譲りを打診され、美保関にいた御子神 事代主命にその旨連絡に行った神様である。鷺浦は航海時代にはとても栄えた地域で、正月2日の夜に行われる新しい年の厄払いのため行うシャギリは、秋田のなまはげが北前船により到来したことが起源であると聞く。10人ばかりの鬼の面と白衣に赤帯姿の若者が、集落の中心路地の東西、榊と舞を携えて西・東に厄払いのかけ声をあげながら練り歩く。個人の家でも舞無し、榊の葉が沢山落ちるのがめでたいという。



10 鷺浦・古民家 鶴の緋絵(こてえ)

鷺浦では、集落の半数が空き家になっていて、鶴鷺元気が仲介して、U-Turnの受け入れ住宅になっている。「塩飽屋(しわくや)」という屋号の塩を扱った商人の古民家は、中庭の樹齢400年の老松が美しくそれを眺めながら休憩する「ギャラリーしわくや」は、3月から11月までの土日祝日に開店する。しわくやでは、最近は軽食も提供するようになっているが、お菓子付きのコーヒーを傾けながら、ギター・アコーディオンの演奏が旅の心を和ませる。



11 鷺浦・三日月湾洞(みかづきわんど)

この「三日月湾洞」と呼ばれる縦横50m×30mの「縦穴海食洞」は、上空から見ると文字通り三日月型になっている。この海食洞は海側にも通じていて鷺元気がつなで5月頃から9月頃の閑船を出してくれる。三日月湾洞は陸上からは、鷺浦の西側灯台を目指して60分ばかり歩いて行ける。出雲国風土記に記述されている「脳(なづきのいそ)」の研究対象地としては、猪目町「猪目の洞窟」の他5ヶ所あると聞く。その2つが鷺浦・鶴峠地域にあり、3ヶ所は鶴峠の東500mばかりの猪目町地域にあるという。



12 鶴峠浦・大宮神社

この神社の本殿の正面しめ縄の上に波を飛ぶ白兔の像があるが、祭神は級長津彦・級長津姫風の神で、波をもとせす跳びはねる兔により漁業の安全を祈るものだろうか。ここ鶴峠浦でも大宮神社前を出発して正月2日の午後1時に厄払いのシャギリ舞がある。神社前に始まり町内を歩き門付けする。この一行はその夜鷺浦のシャギリに合流する。



13 黄泉の穴洞窟

出雲国風土記の出雲郡条「脳(なづきのいそ)」について、猪目町の「猪目の洞窟」の他に地元研究者の異論として鷺浦と鶴峠浦の海岸の中程の洞窟を「黄泉の穴」とする説が発表されている。「夢にこの洞の窟(いわや)のほとりにいた者は必ず死ぬ」と言う洞窟の雰囲気と、穴口の高さ一丈の記述に近いという。この黄泉の穴洞窟、面坂トンネル鶴峠から釣り人道を海岸まで歩いて20分ばかり、鷺浦の港の東側からも徒歩か船で案内もする。十六島(うつぶら)湾の南側奥宇賀町には、その穴の奥が出雲大社につながっていると伝わる「冥土さん」があり、その小さい社には出雲国風土記の「脳(なづきのいそ)」の前段に記述されている求婚を断った「鏡戸女(あやとひめ)命」と「大国主大神」が祀られている。

1 稲佐の浜・弁天島

出雲大社から「神迎えの道」(国道431号線)を西側1kmばかりで海岸に突き当たる。そこが稲佐の浜で古事記に見える国譲り神話の舞台であり、旧暦10月10日には出雲屋で言う「神在月」に神在祭が行われる。神在祭、2020年は11月24日の夜7時頃に八百万の神々を「龍蛇」が先導して出雲大社に向かうという神事が厳かに行われる。弁天島あたりの海岸は遠浅で小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が出雲大社を訪ねるたびに、泳いだと伝わる。

2 出雲大社

宝永七(1710)年の「出雲四十二浦の垢離取歌」の序文に「八雲の国の大社(おおやしろ)なれば、杵築神社を初めとして左の浦々の神等を拝み奉りかくなん」とあり、当時出雲大社は「杵築大社」と呼ばれていた。また、垢離取歌の頃には、杵築大社の祭神は現在と異なり須左之男命であった。出雲大社は平成25年に60年ぶりに「平成の大遷宮」が執り行われ、稲田姫の木像などを祀る宝物殿も装いを新たにしている。

3 古代出雲歴史博物館

古代出雲歴史博物館には、太古の出雲大社の本殿の高さは96m、13世紀半ばには現在の2倍にあたる48mあったと言われ、それらのミニチュア模型が展示されている。平成12年には、その社伝を裏付けるかのような、直径3mもの巨大な柱根「宇豆柱(うづばしら)」が境内で発見され、その木柱が展示されている。また、1984年斐川町荒神谷で発掘された国宝銅剣358本、加茂岩倉遺跡の銅鐔など全国屈指の発掘物が展示されている。令和2年4月23日まで改修工事のため閉館中。

4 奉納山

奉納山は稲佐の浜に向かう「神迎えの道」の途中右手の海拔75mの小高い山である。我が国最大規模の巡礼で法華経を66部全国に納経して回るもので「六部」と呼ばれているが、ここ奉納山では、戦国時代の金銅板製の経筒が20点発掘されている。その「奉納山公園」から南側には国引きの綱に見立てられている稲佐の浜海岸と国引きの西側の杭とされている三瓶山の眺望がすばらしい。その公園の道路向かい側の岡には、歌舞伎の始祖とされる「お国」の墓がある。お国歌舞伎は、出雲市河下町の念仏踊りを起源とする「河下盆踊り」(8/13)が起源であるという。

5 弥山のごえんゴウロ

ごえんゴウロは、出雲大社の裏山に連なる弥山の東中腹にある。流紋岩の巨大な岩脈群が崩落した山崩れによって形成されている。山崩れの広がりには海拔320mから150mで遠景の最大幅は75mであり、ここ石の大きさは30cmから50cmあるという。「ごえん」の形と大きさは、国内でもきわめてユニークな存在と言うが、五円なかご縁のか名前の由来を考える。

6 日御碕神社

日御碕神社は、素戔鳴尊を祀る上社「神の宮」と、江戸時代中期から祀られている天照大神の下社「日沈みの宮」(ひしずみのみや)の2社を日御碕神社と総称する。天照大神を祀る社は、神社の西側経島(ふみしま)に、2000年前から祀られていたと伝わる。島根半島にはこの他分霊された3つの日御碕神社がある。ただし美保関町笠浦は「日御碕神社」で「崎」となっている。